

## 審査の結果の要旨

氏名 武田俊信

本研究は狭義の高機能 ( $IQ \geq 85$ ) 広汎性発達障害 (HFPDD) のある児童・生徒 23 人と年齢、性、IQ、言語性 IQ、動作性 IQ および両親の社会経済状況をマッチングさせた定型発達をしている児童・生徒 23 人について道徳性検査の結果および道徳性検査の結果と他の諸検査の相関を 2 群間で比較検討したものであり、下記の結果を得ている。

1. イラスト付の質問文により道徳性の内面化レベルを評価する内面形成 (総合と因子分析により抽出された 3 つの下位項目、思いやり・自己確立・生活規範よりなる) において HFPDD 群は control 群に比して有意に総合、思いやり、生活規範で標準得点が低かった。有意差のみられた 3 つの項目でマッチングの指標とした項目と道徳性検査の結果において影響が大きいと予想される Wechsler Intelligence Scale for Children-III (WISC-III) の群指数の言語理解、下位項目の理解を共変量とした共分散分析で 2 群の道徳性検査の結果を比較したところ、思いやりで理解を共変量とした場合以外はやはり 2 群間に有意差が認められた。

2. 内面形成のレベルは 4 段階に分かれており、各項目で年齢には依存せず両群ともにほぼレベル 3 (規範遵守型) 以上となっていたが、レベル 4 (自立愛他型) に達するものは特に HFPDD 群で少なかった。これは年齢を重ねてもコールバーグの後慣習的・原理的水準に達するものは稀であるというこれまでの定型発達児・者の報告と一致していた。思いやりで HFPDD 群の 7 名がレベル 2 (他者指向型) となっていたのが際立っていた。

3. 道徳性検査と WISC-III の関係では、HFPDD 群では内面形成と群指数の言語理解、下位項目の知識や理解といった言語能力に関する項目が有意な相関を示し、

2 群間の相関の差の検定でも有意差がみられた。HFPDD のある児童・生徒においては断片的ではあるが WISC-III の言語能力と関連する項目と道徳性検査の項目間で有意な相関がみられるのが特徴的であり、定型発達をしている児童・生徒ではそのような相関はみられなかった。このことから定型発達をしている児童・生徒においては言語能力のみとは大きく関連しない道徳性を HFPDD を有する児童・生徒では比較的優れた言語能力で補おうとするが、共感など何らかの不足により全体として定型発達をしている児童・生徒と有意な差がでてしまうと推察された。

4. 道徳性検査と新版 S-M 社会生活能力検査の各項目の関係では HFPDD 群で内面形成の総合と全社会生活指数 (SQ)、内面形成の総合と身辺自立 SQ、内面形成の総合と集団参加 SQ、内面形成の思いやりと全 SQ、内面形成の思いやりと集団参加 SQ で HFPDD 群で有意な相関が認められ、かつ 2 群間の相関係数の差の検定でも有意差が認められた。内面形成の総合、思いやりと集団参加 SQ に有意な相関がみられることに関しては、道徳性の内面化が成熟して初めて集団参加が可能となり、また集団参加を重ねることで道徳性を内面化が進展するという、双方向性の過程が想定された。

5. 3、4 より定型発達をしている児童・生徒では今回の研究で施行した諸検査により道徳性の内面形成水準を推し量ることは困難だったが、HFPDD のある児童・生徒においては、新版 S-M 社会生活能力検査の全 SQ、集団参加 SQ、WISC-III の理解、知識といった項目によりある程度は道徳性の内面形成の水準を推測することが可能であることを示した。

以上、本論文はこれまで詳細に検討されたことのなかった HFPDD のある児童・生徒の道徳性の特徴を定型発達をしている児童・生徒との比較を通じて明らかにすることで、治療教育・医学上重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。